

別れから再生へ

中野 理恵

爽やかな映画である。ダフネは母マリアと父ルイジと三人で暮らし、スーパーで働く元気で明るいダウン症の若い女性。だが、家族でバカンスを楽しんでいた時に、マリアが急死してしまい生活が一変する。当初は悲しみに暮れていたダフネだが、葬儀を終えスーパーに戻ると、思いもかけず同僚たちに励まされる。そして、以前のように仕事に取り組む日々が続くに従い、悲しみから立ち直っていった。

だが、父のルイジはダフネとは異なり、ふさぎ込むことが増えていく。そんなルイジをダフネは、「煙草の吸い過ぎで息がくさい」と鬱陶しそうに遠ざけ、ノックもせず、いきなり自分の部屋のドアを開けるルイジに「プライバシーの侵害よ！」と怒鳴り、「愚痴をこぼす人は嫌い」と、心無い言葉を投げつける。受け止めるルイジの情けなさそうな表情。老年に差しかかった時期に、長年連れ添ったパートナーを失い、どこにも持っていきようのない悲しみと喪失感を、ルイジ役のアントニオ・ビオヴィネリが見事に演じている。肩を落とし、顔には皺が目立ち、情けなさそうで気落ちした表情には、見てのこちらまで気持ちが沈んでしまう。

ルイジや同僚に対して口には出さずとも、ダフネにしても、どこにも持っていきようのない気持ちと闘っていたのだった。「私は泣きたい」と口にし、ある日には冷蔵庫を開けると、いきなり袋からハムを取り出し、手づかみで食べるように食べ始める。〈ヤケ食い〉だ。ドアを開け放した冷蔵庫の前に立つダフネは、わけのわからない巨大な何かと闘ってでもいるかのようだ。それは裡にこもる悲しみと、そうはいっても落ち込んでいる父を励まさなければならない、などのさまざまな思いが入り混じり、出口を見つけれない自分にいら立っているのだった。この冷蔵庫のカットに共感する人は多いだろう。



©2019, Vivo film - tutti i diritti riservati

そんなある日、弱音を口にしたルイジに、ダフネは「私たちは共働きの、一つのチームなの」と言い、「母さんに会いに行かない？ 歩いて行くの」と提案。二人の徒歩旅行が始まる。

この旅がいい。リュックを背負い、トスカーナに向かう。下に傘が横に括り付けられているリュック姿のダフネの後ろ姿。草木が低く生い茂る山道を二人して歩く。湖のほとりや氷室、人家もなく、行き交う人もいない。静かである。たまに舗装道路を行くと、脇を自転車に乗った若者が勢いよく通り過ぎてゆく。父娘二人だけの時間と空間。宿屋の夫婦との会話、二人をジープに乗せてくれる若い森林警備隊員。そして、次第にそれぞれの悲しみが癒えてゆく。

ダフネを演じるカロリーナ・ラスパンティは1984年生まれで、本作が映画初出演とは思えない名演技である。彼女は、実際に地元のスーパーで働きながら、既に自伝小説を2冊出版しただけではなく、講演等もこなし、現在は本作への出演体験をもとに3冊目の著書を執筆中とのことだ。なお、本作はベルリン国際映画祭パノラマ部門の国際批評家連盟賞受賞の快挙を成し遂げている。

本作に対して抱いた爽やかさは、彼女の演技によるところが大きいと思う。

《Cinema Information》

『わたしはダフネ』

イタリア映画 (94分)

監督：フェデリコ・ボンディ

6月6日より岩波ホールほか全国順次公開予定

なかのりえ：映画プロデューサー、ディストリビューター。
(株)バンドラ代表。100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著書に『すきな映画を仕事にして』（現代書館、2018）等。